

KANT の批判期前における道徳原理の探求と確立

—その 9—

木 場 猛 夫

Ⅳ 批判的倫理学への道 ——1770年代——

- (1) 『感性界及び叡知界の形式と原理』（前号）
- (2) 書簡集 ——批判的問いの提起——
- (3) 『講義』及び手記遺稿集 (次号)

(2) 書簡集 ——批判的問いの提起——

1770年の就任論文以降、カントの哲学的思索はどの様に展開されていくのか、とりわけ批判的問いはどのような思索を通して提起されるに至るのか、この問題を書簡を通して考察するのが、われわれの当面の課題である。

さて就任論文に対する Kant 自身の反省が早くも翌1771年6月7日、Marcus Herz 宛の書簡に記されている。「私は自分の判断を他人の立場から公平に観ることによって、私の以前のものよりも優れた第三のものを得たいと常に望んでいます。さらにこうした洞察力をもった人達を説得する力が足りなかったということだけでも、いつも私の理論に少なくとも判明性・明証性、或はより本質的な或るものを欠いているに違いない、という証明であると思います」(X.S.122)。文中の「こうした洞察力をもった人達」とは、Herz の先生 Mendelssohn や Lambert を指している。ここで問題は「より本質的な或るもの」とは何か、ということである。これに関しては右の文に続く以下の書簡が解答を示唆しているであろう。「ただ単に感性だけでなく悟性という人間の心的諸力の主観的諸原理に基づくものと、直接に対象に関係するものとを区別することにおける確実で明瞭な洞察が、哲学全体において、いやそれどころか人間の最も重要な目的一般に対して、どんなに大きな影響をもつものであるか、あなたをご承知の通りです。……そういうわけで私は、目下、感性と理性との限界 die Grenzen der Sinnlichkeit und der Vernunft という標題の下に、感性界に対して規定された根本概念及び法則の関係ならびに興味論、形而上学及び道徳の本性をなすものの構想とを併せ含むべき一冊の著作を、些か詳細に仕上げることに没頭しています。今年の冬を通じて、私はそのための材料を全て点検し、全部をえり分けて考量し、相互に適合させましたが、そのための計画はつい最近完了したばかりです」(X.S.123)。

この書簡からみると、Kant は就任論文に対する批評を通して自らの所説を反省し、直接に対象に関係する原理と間接的に対象に関係する原理、感性と悟性という人間の心的諸力に基づく主観的原理と客観的原理の区別及び両者の相互関係を緊急の問題とするに至ったとみられる。この問題は一語で言えば「感性と理性の限界」の問題に他ならない。就任

論文では感性界と叡知界の二つの世界にそれぞれ感性的認識原理と純粋悟性の認識原理が成立していた。そして謂わば絶対的な純粋悟性原理に対して感性的認識原理の僭越を防止することに力点が注がれた。ところが今や両者は共にそれぞれ限界をもち、その限界をもった感性と悟性、それに加えて理性が、相互に如何なる内的関連によって総合されて認識を成立させ得るか、という問題に Kant の哲学的関心は内面化してきているのである。このための「より本質的な」問いとは、「感性と理性の限界」という標題の下における研究とみられる。より厳密に言えば、感性と悟性と理性のそれぞれの認識論的機能とその限界及び相互の内的関係の研究ということになろう。この様にみえてくると、われわれは就任論文から一年にして Kant の思索に変化がみられ、より本質的な認識的課題に取り組んでいることを確認する。思索の変化を具体的にみると、第一に、就任論文においては、叡知界の客観的原理の能力であった悟性が、この書簡では感性と共に、それと一括されて「主観的原理」とされている点があげられる。就任論文においては、謂わば感性の上位を占めていた悟性が、今や同列に置かれるに至っている。第二に、感性と悟性に対し、今一つの原理能力としての「理性」が加えられていること、しかもその「理性の限界」が認められていることである。これは又従来の悟性が理論的、実践的に分けられ、しかもそれぞれの限界が自覚されるに至ったとも解される。この限界の自覚は、思想発展史的には極めて重要なことと言わなければならない。何故ならば、従来真理の規準として絶対であった悟性または理性が、あくまで人間の心的諸力である限り限界があるという有限性の自覚は、合理主義的理性論からの脱却を意味していると解されるからである。そしてこの脱却は、批判期の間近いことを告げていることでもある。この時点で Kant は、自ら構想している哲学の全体にわたり、とりわけ道徳哲学について、自覚された人間の限界の下に考え直し、再構成を試みつつあったのではなかろうか。

1772年2月21日、同じく Marcus Herz 宛の書簡は、いよいよ批判期の開幕を告げるものとして従来非常に注目され、重要視されてきた。例えば Bauch は、この書簡は、簡略を旨とする Kant の書簡としては、全く驚くべき広範囲のものであって、その内容においては、優に一つの学術論文に相当する価値をもち、またこの思想家の発展行程に対して最も重要な文献の一つを呈示していると言うのである。¹⁾ 先づこの書簡は Kant の研究計画について告げられている。「私は……私達が論議した考察の計画をもう一度眺め直しまして、その計画を哲学全体及びその他の認識に適合させ、そしてその計画の範囲と制限とを把握しました」(X.S.129)。先にわれわれが1771年の書簡を通して推察したように、Kant は人間の諸能力の限界という観点の下に研究計画を再検討しているとみられる。そして道徳の諸原則については「感性的なものと知性的なものとの区別」を問題にしていること、さらに「感情や趣味及び判断力の諸原理とそれらの作用」について立案し、これらを取り纏めて「一つの著作にする計画」を立てていることを報じている。ここで注目されるのは、この著作に、Kant が「感性と理性との限界」という表題を考えていることである。つまりこの時点での Kant の中心課題は、一貫して「感性と理性との限界」に絞られていたとみる事が出来るし、この課題がそのまま Kant を批判哲学へと導くことになるのである。

この「感性と理性との限界」という表題の下に構想されている概要は、次の様に分類されている。

第一部 理論的部門

第一章 現象論一般 第二章 形而上学

第二部 実践的部門

第一章 感情・趣味及び感性的欲望の普遍的諸原理 第二章 道德性の第一根拠

Kant はこの分類中の理論的部門を、その全範囲にわたり、又各部分の相互関係からみてさらに反省を深めると同時に、一つの重要な着想に至るのである。

「私にはまだ何か本質的なものが欠けており、それは私の久しい形而上学的研究において、他の人びとと同様見過ごしてきたものであり、しかもそれは実際には、これ迄それ自体隠されていたものである形而上学のすべての秘密を解く鍵となるものである、ということに気がつきました」(X. S. 130)。Kant はこの時期、認識における「本質的なもの」を追求し続けている。それは「形而上のすべての秘密を解く鍵となるもの」でなければならない。では一体「本質的なもの」とは何であろうか。

それは一つの問題提起によって自ら答えられる。「つまり私は自問しました。私達の内部で表象と呼ばれているものが対象に関係するのは、如何なる根拠に基づくのかと」(ibid)。これは人間の内的表象が対象と一致する根拠への問いである。この問いの特徴は、認識の事実から発した原理の追求ではなく、認識そのものの可能根拠を問う権利問題である点にある。カントはこの自らの問に対し自ら答えていく。単に主観が対象から触発される仕方だけを含むとすれば、如何にして表象はその触発という原因の結果として対象に適合し得るかという問いは容易に理解できる。というのは、その場合表象は、「受動的或は感性的表象」として専ら対象を感性的、すなわち受動的に受けとるに過ぎないからである。これに対して人間の内的表象が客体に対して能動的であれば、対象すらも表象によって産出するから、表象と客体との一致はまた容易に理解できる。要するに、前者の様に「論理的操作の与件を事物の感性的直観から汲みとる」『模型的知性 intellectus ectypus』も、後者の様に、その直観に物自体が基づく「原型的知性 intellectus archetypus」も共にその可能性は理解するに難くはない。

ところが「しかし私達の悟性はその表象によって（善き目的に関する道德の場合以外では）対象の原因ではありませんし、また逆に対象が（実存的意味において）悟性表象の原因でもありません」(ibid)。つまり人間の悟性は「原型的知性」でもなければ、「模型的知性」でもない。謂わば両方の性格をそれぞれに兼ねているといえよう。そこで Kant はわれわれ人間の悟性としての純粹悟性概念を次の様に特徴づけるのである。(一)純粹悟性概念は、感官の感覚から抽出されたり、感官による表象の受容性の表現でない。(二)魂の本性の中にその起源をもたなければならない。(三)客体によって惹き起こされたり、客体そのものを産出したりするものでもない。

Kant はこの純粹悟性概念の「知性的表象」の概念に関して、就任論文における考え方と現在とでは早くも変更を来していることを自ら告げている。「私は就任論文では、知性的表象の本性を単に消極的に表現すること、すなわち知性的表象は対象による心の変様ではないであろうということに満足しておきました。しかしその他に、対象によって何等らの仕方で触発されることなしに、しかも対象に関するような表象が一体如何にして可能であるか、という問題には黙って通り過ぎてしまいました」²⁾ (ibid. S. 130f)。就任論

文では感性的表象は物を現われるままに表象し、知的表象はそれを在るがままに表象するとされていた。この立場は、感性的表象について言えば素朴实在論であり、知的表象について言えば悟性的合理論と言えるのではなからうか。ところが、ここに至って Kant は両方に自ら鋭く疑問を向けるのである。「しかしこの物は、もしそれらがわれわれを触発する仕方によって durch die Art, womit sie [Dinge] uns affizieren そのようになるのではないとすれば、何によってわれわれに与えられるのでしょうか。またもしこうした知的表象が私たちの内的活動性に基づくものであるとすれば、これらの知的表象が対象と共にもつべき両者の一致はどこから生じるのでしょうか。これらの対象は内的活動性によって生み出されるものではないのです」(X. S. 131)。

この箇所から明らかな様に、Kant は感性的表象を物が現われるままの表象とみず、事物がわれわれを「触発する仕方」を通して現われるとし、他方、知的表象は在るがままの表象ではなく、われわれに現われたものに係わり、対象との一致を可能にする、と考え始めていることが分る。この考えには当然「感性と悟性との限界」が前提になっている。従って「これらの諸対象についての純粋理性の公理は、知的表象と対象との一致が経験によって助けを借りてくることが許されなかったとすれば、これらの公理はどこからこれらの対象との一致が生じるのでしょうか」(ibid)と語られている様に、「経験の助け」が求められ、その上で知的表象と対象との一致及びその根拠が追求されるのである。就任論文とそれから二年過ぎたこの書簡の相違を基本的に言えば、就任論文においては、感性的認識と悟性的認識とが感性界と悟性界に対応して二元的に峻別されていたのに対し、72年の現時点では、感性と悟性の限界の上に感性的認識と悟性的認識の「総合」による認識の可能根拠が問われているのである。就任論文における純粋悟性認識は、物を在るがままに認識するという合理的独断に基づくものであったが、この独断は「知的表象が対象と共にもつべき両者の一致は、どこから生ずるか」という自らの設問によって否定されたのである。この設問は Kant が就任論文以後、一貫して課題とした「感性と理性との限界」から、必然的に提起された人間の認識能力そのものに対する批判的問いと言えよう。従ってわれわれはここに認識論的な意味における Kant の批判哲学の第一歩が踏み出された、とみるものである。Windelband もこの問いによって Kant はあらゆる認識論的研究の核心を突いたという。そしてこの問いとその解答の中に認識論的領域における Kant の哲学の真の出発点と偉大さがある。この問いをもって Kant は「素朴实在論」をその全意義において洞見し突破しようとしているのであり、それと共に初めて批判哲学の入口に立っているのであるとしている。³⁾

では一体われわれ人間の内部における表象が対象と一致する根拠は何であろうか。Kant によると、Platon は純粋悟性概念及び原則の根源的源泉を前世において精神が神を直観したことに求め、Malebranche はこうした根源的存在者の今でも存続している永続的直観を考えたし、イギリス・モラリスト達は道徳的第一原則に関してこれと同じ根源的存在者を考えた。さらに Crusius は判断のための生得の規則と、神が人間の魂の中に予め植えつけておいた物と調和させるための概念を考えた。これらの諸体系は、前者を「超自然的影響」、後者を「知的予定調和」と呼ぶことが出来るが、共に「機械仕掛けの神 Deus ex Machina」を前提しており、そのためにわれわれの認識の根源と妥当性の規定を、最も不合理であるとして厳しく斥けるのである。そこで Kant 自身は次のように

思索と研究を進めていくのである。「私はこのようにして、これがなくては形而上学の本性と限界が規定され得ない知的認識の源泉を求めることによりまして、この学問を本質的に異なった諸部門へと区分しました。そして超越論の哲学を、すなわち全く純粋な理性の概念すべてを、或る数の範疇に分けようとしてしました。しかしそれらの概念を自分が見出すが儘に十箇の賓位語に、単に偶然的に相互に並べた Aristoteles の様ではなくて、範疇の概念そのものが悟性の或る少数の根本法則によって、自ら諸部門へ分類されるのです」(X. S. 131. f)。

Kant は自ら提起した批判的問いに対して、純粋悟性概念を「範疇」として把握し、その総合作用によって答えている。言い換えれば対象とわれわれの内部表象との一致は、範疇を根拠として可能となると考えている。就任論文においては、Windelband の言葉を借りると、Kant は感性と悟性の関係を「素朴实在論の心理学的図式」⁴⁾に従い受容性と自発性との対立として根底に置いた。そして感性的認識と悟性的認識とが二元的に峻別されて主観的原理と客観的原理をそれぞれに成立せしめていた。しかし今や範疇によって両者の根本的な「総合統一」が意図されている。Kant は Aristoteles の範疇の着想が偶然的であり思いつきであると批判し、自分は「悟性の少数の根本法則」に基づいて分類する旨を述べている。範疇という純粋形式によって直観に与えられた多様は総合され、その純粋形式のためにその総合された対象認識は普遍妥当性を確保し得るのである。従来形而上学が何を対象とするか、という事実のみを問題にしたのに対し、Kant は如何にして対象は成立するか、という権利を問題とした。しかも対象そのものではなく、認識主観の純粋形式の中に対象認識の普遍妥当性を基礎づけたのである。Cassirer はこの着想の中に、既に後になって Kant が認識論のコペルニクスの転回と呼んだ思考法の変革が果たされていると言う。²¹⁾ともかく感性の受容性によって与えられた経験の多様は、悟性の自発性により範疇を通して先天的に総合されることによって対象の客観的認識は成立する。この範疇による総合の発想は、『純粋理性批判』の決定的部門である。「超越論的分析論」の「範疇論」へ発展していくことになる。この範疇による総合の概念から全く新しい解釈の光が「超越論の感性論」に反射してくる。⁵⁾思想発展的に「総合」という観点からみると、感性的認識と悟性的認識の正しい総合は、「真理の論理学」としての「超越論的分析論」へと展開し、不正な総合は、「仮象の論理学」としての「超越論的弁証論」へと展開していくことになる。Kant は『純粋理性批判』において「如何にして先天的総合判断は可能であるか」という根本問題を一貫して追求していくのである。

さて「私は今ならば、理論的認識ならびに単に知性的である限りでの実践的認識の本性を含む純粋理性批判 eine Kritik der reinen Vernunft を提示することができます」(X. S. 132.)。1772年のこの時点で、Kant は既に『純粋理性批判』への展望と自信を述べている。ここで意図されている「純粋理性批判」の内容は、第一部 形而上学の源泉とその方法及び限界、第二部 道德性の純粋な原理となっている。従ってここでは「純粋理性批判」は「道德性の純粋な原理」を含み、しかも形而上学と二分する分野を占めていること、しかし形而上学と比較すると、その構想は未だ纏っていないことが、次の言葉で分る。第一部は「約三ヶ月以内に出版することになるでしょう」(ibid)。予定の三ヶ月は、結果的にみると九年の月日を要することになるのである。

われわれは72年2月21日のこの書簡について、最後に道德的観点から次の箇所を再度引

用し考察しておきたいと思う。「しかし私達の悟性は、その表象によって（善き目的に関する道徳の場合以外では）対象の原因であるのでもなく、また逆に対象が（実在的意味において）悟性表象の原因であるのでもありません」（X. S. 130）。この箇所から言えば、人間の悟性はその表象によって対象の原因とはならないし、また逆に対象が悟性表象の原因ともならない。しかし道徳の場合は、悟性はその表象によって対象の原因となるということになる。このことは認識において否定された「原型的知性」の理念が、実践的領域、すなわち道徳の場合には肯定されていることを意味するであろう。純粹悟性或は純粹理性は、認識の領域においては自ら対象の原因とはなり得ない。何故ならば認識の場合は、対象によって触発されることを前提とし、感性の協同がなければならない。つまり受動と能動の二重性を必要とするからである。これに対して、純粹理性は道徳の領域においては、専ら行為の原因としてその純粹自発性だけが必要となる。先に引用した箇所は以上のことを暗に語っているとみることが出来よう。ここからわれわれは強いて次の様な解釈を試みることが許されるかと思う。純粹理性の理論的使用においては形而上学は断念されざるを得ない。これに対して純粹理性の実践的使用においては道徳形而上学への道が残されている。上の引用文を「善き目的に関する道徳の場合」について考えると、そこにこの解釈の論拠が得られるのではなかろうか。

さて1772年以後の Kant の哲学的、道徳的思索は如何なる過程を辿るのであろうか。1773年末と見做される Marcus Herz 宛の書簡についてみると、三つの点で注目される。第一はこの書簡が「道徳性の最高の根拠」に言及されている点である。「最高の実践的要素は快と不快」（X. S. 145）であり、これらは経験的で、快、不快の対象は認識可能である。これに対し純粹悟性概念は、感性的なものに関しては無規定的であるから、感性への法則または規則はこれを一切与え得ない。そこで Kant は次の様に考える。「道徳性の最高の根拠は、単に快適さを推論させなければならないだけでなく、それ自体最高度に快適⁶⁾でなければなりません」（ibid）。従って道徳の根拠は決して単なる思弁の表象ではなく、動因力をもたねばならないために知性的であると同時に感性的でなければならない。かくてはじめてこの根拠は「意志の第一動機 die erste Triebfeder des Willens」に対して直接の関係をもち得るのである。この動機の内容についてはここでは未だ触れられていないが、これは『倫理学講義』では「道徳的感情」、批判期の倫理学では「尊敬の感情」とされているものである。ここでは道徳に関しては、単に原理の追究ではなく行為との関連において、その具体的「最高根拠」が問題となってきたことが察せられる。

第二のこの書簡の注目点は、「私の超越論的哲学は……それは本来純粹理性の批判である」と断言していることである。しかし詳しい説明はここでは何もない。にも拘らずこの超越論的哲学は、1772年の批判的問いの提起とその解答から、さらには就任論文における予備学と同じ位置づけ、同じ基本性格である『純粹理性批判』から推して、「対象にではなく、寧ろわれわれが一般に対象を認識する仕方——それがア・プリオリに可能であるべき限りにおいて——に関する一切の認識」(B. 25)としての超越論的哲学と殆ど同一のものとみてよいと思われる。この書簡では、この超越論的哲学、すなわち純粹理性批判が完成したならば、その後「形而上学」に取りかかることが告げられている。それは「自然の形而上学」と「道徳の形而上学」の二つの部門をもつこと、しかも出版は後者が早く、そのことを自らも楽しみにしていることも予告されている。この時点では既に、批判はそれ

に基づく形而上学と共に、哲学体系の二分野を構成するという Kant の基本的哲学分類の素地が出来上っているとみられる。

注目される第三点は、「人間学」の講義に対する Kant の姿勢である。Kant は既に人間学の私講義を始めており、この年の冬学期には第二回目を予定している。さらにはこの人間学の講義を「大学の正科」にしたいという意欲も語っている。ここにわれわれは Kant の人間に寄せる強い関心と展望をみる事が出来る。さて人間学における Kant の意図は次の通りである。「私がもっている意図は、人間学によってすべての学問の源泉、道徳、熟練、社交、人間を形成し統制する方法、従ってすべての実践的なものの源泉を提示しようとする事です」(ibid)。この場合、Kant は人間の本性一般の変様の可能性の第一根拠よりも、現象とその法則を多く求めている。このことは Kant が自分の学生に対して彼等の世間的経験不足を補充するための「予備的訓練」という教育的配慮から生まれたものである。この予備的訓練は Kant によって「世間知 die Kenntniss der Welt」と呼ばれているが、それは現実的な人間理解を基本とするもので、既にこれより十年余も前、『1765-66の冬学期の講義公告』でも「若い思想家の早熟な饒舌」(Ⅱ. S 305)を慎しみ、豊かな経験と人間理解が強調されたことと一貫していると言えよう。

次にわれわれは、1776年11月24日の Marcus Herz 宛の書簡を取り上げる。この書簡は1772年2月、すなわち純粹理性批判の第一部「形而上学の源泉とその方法及び限界」を約三ヶ月以内に出版することを予告した時点から、4年9ヵ月を経ているものである。この書簡はこの間の事情を述べている。「実際私は、自分が研究している領域において若干の業績を挙げようとする希望を諦めてはいません。私は各方面から何もしていないという非難を受けています。それは長い間何もしていないように見えるためですが、しかし実際は、私はあなたとお別れしてからこの数年程、体系的にしかも持続的に仕事をしてきたことはありませんでした」(X. S. 198)。では Kant が無為の非難に耐え乍らひたすら取り組んだ「研究対象」とは一体何であったのであろうか。書簡によると、それは今から考え出されるという段階ではなく、既にそれを纏め完成することが必要なだけという段階に達していることが告げられている。「あなたがご存知の様に、あらゆる経験的諸原理から独立に判断する理性、すなわち純粹理性の領域が概観され得なければなりません。何故ならばその領域はわれわれ自身の中にア・プリオリに存在し、経験からは如何なる開明も期待されないからです。ところでこの領域の全範囲、その区分、限界、全内容を確実な諸原理に従って書いて見せたり、また将来われわれが理性或は詭弁の地盤に在るかどうかを確実に知り得るように境界石 die Markstein を置くためには、純粹理性の批判、訓練、規準及び建築術が必要です」(ibid, S. 199)。Kant の研究対象は要約すれば、ア・プリオリな純粹理性の概観である。既に1772年2月、批判的問いは提起されそれを解決すべく超越論的哲学が提唱されていた。そこでは範疇による総合が解決の鍵とされていたが、このことを完成させ、さらに純粹理性の原理によって純粹理性そのものの限界を設定し、限界の内と外、言い換えれば理性の地盤と詭弁の地盤の接線に境界石を設置すること、このことに苦心し努力していたとみられる。この研究の方向は超越論的弁証法から方法論への道である。従って『純粹理性批判』の全図案が既に Kant にはこの時点で構想されていると言ってよいであろう。「その学問のためには既に現在しているものは何ら使用出来ず、その学問の基礎づけるためには全く独自の技術的表現すら必要とする」(ibid)とされて

いる当の学問とは「形式の完備した学問」つまり「純粹理性の批判」に他ならない。この学問は全く独自の哲学的創造でなければならない。この時点の Kant は、前人未踏の荊棘に富める批判の小径を全く独自の方法で独り進みつつあったのである。

翌1777年8月20日付けの同じく Marcus Herz 宛の書簡には、自分の研究が「体系的な形態」を得てきて「全体の理念」へと導かれつつあることが述べられている（X, S. 213）。「これ[理念]が、価値についての判断と諸部分の相互の影響を初めて可能にするものです。この仕事を全部成し遂げるには、私が純粹理性批判と呼ぶものが一つの石の様に途上に横たわっています。私は今この石を取り除くことだけに従事していますが、今年の冬にはそれをすっかり片づけられたらと思っています」（ibid）。ここでは体系とその予備学、両者を含む全体の理念が明確にされ、その下に Kant 哲学の立体的構造が現実化されていく一方、その地盤固めに苦心と努力が払われている様子が察せられる。しかし「批判」の完成迄にはなお約4年の年月を必要とするのである。

この後は、1778年8月28日、Marcus Herz 宛の書簡では人間学講義についての報告がみられる。そして3年後、1781年に至り、その年の5月1日、これも Marcus Herz 宛の書簡で、いよいよ『純粹理性批判』の公判が具体的に告げられている。「今年の復活祭のミサには私の著わした本が『純粹理性批判』という標題の下に公刊されるでしょう」（X, S. 266）。この著作は、Kant の就任論文『感性界と叡知界との形式と原理』の公開發表の際に応答者の任務を果たしたこの Marcus Herz が一緒に弁論した諸概念に始まる極めて多様な研究の結果を含むとされている。従ってこの意味の『純粹理性批判』は就任論文における予備学の集大成とみてよいであろう。予備学は形而上学 そのものではない。Kant 自身の言葉で言えば、予備学は「形而上学の形而上学 die Metaphysik von der Metaphysik」（X, S. 269）である。

以上、われわれは専ら書簡を通して批判的問いの提起と、その解決としての『純粹理性批判』の成立過程を考察してきた。この考察を終るに当たり、この間の道徳哲学に関する Kant の主な研究計画の過程を要約しておきたい。

1770年9月2日付 Lambert 宛の書簡によると、道徳哲学には如何なる経験的原理も含まれていない「純粹道徳哲学」と、いわばその純粹理論の現実への適用としての「道徳形而上学」の両分野が考えられ、それに関する自分の研究を整理して完成したい Kant の意向が告げられている（X, S. 97）。翌1771年6月7日付 Marcus Herz 宛の書簡では、「感性と理性との限界」という標題の下に、感性界の根本概念及び法則の関係と趣味論、形而上学、及び「道徳の本性」をなすもの、これらの構想が立てられ、一冊の著作として詳細に仕上げらるべく没頭していることが告げられている。続いて 1772年2月21日付 Marcus Herz 宛の書簡によると、批判的問いが提起されると同時に、昨年末の課題である「感性と理性の限界」の内容も整理されてくる。すなわち第一部、理論的部門に対する第二部、実践的部門は、第一章 感情・趣味及び感性的欲望の普遍的原理、第二章 道徳性の第一根拠、とされている。前年に「道徳の本性をなすもの」と言われたものが、ここでは「道徳性の第一根拠」という表現に明確化されている。カントは次の様にも語っている。「道徳とそこから生じる諸原則における感性的なものと知性的なものの区別においては、私は以前から既にかかなりの程度迄その研究を進めてきました」（X, S. 129）。これは実践的部門における感性的原理と知性的原理の区別及び純粹な道徳原理の追求を意味するであろう。こ

の長文の書簡の中で道徳に関しても、特に注目されるのは次の箇所である。「私は今ならば、理論的認識、並びに単に知性的である限りでの実践的認識の本性を含む純粋理性批判を提示することができます。まず形而上学の源泉とその方法及び限界を含む第一部を完成し、続いて道徳性の純粋な原理を完成するつもりです……」(X, S. 132)。この時点で「純粋理性批判」は大まかに言えば、第一部 形而上学、第二部 道徳哲学—純粋道徳原理、という構想になろう。

1773年末、同じく Marcus Herz 宛の書簡によると、「私の超越論的哲学が完成したならば、私はさぞ嬉しいことでしょう。それは本来純粋理性批判であります。それから私は形而上学へと進みます、それはただ二つの部門をもっています。すなわち自然の形而上学と道徳の形而上学です。私はそのうちの後者をまず出版します。そのことを前もって楽しみにしています」(X, S. 145)。この時点では超越論的哲学は純粋理性批判として規定され、それ独自の領域を構成して形而上学に相對している。前年からの推移で著しい点は、前年は純粋理性批判が形而上学と道徳哲学を自らの領域に内包していたのに対し、1773年末は批判は形而上学と相對して位置づけられ、しかも形而上学が自然と道徳の形而上学の二分野を構成していることである。さて1776年11月24日 Marcus Herz 宛の書簡で、当時の主要な研究対象として、「あらゆる經驗的諸原理から独立に判断する理性、すなわち純粋理性の領域」の概観が述べられているが(X, S. 199)、それは具体的には、純粋理性の批判、訓練、規準及び建築術に止まり「道徳の形而上学」には言及されていない。これから後、『純粋理性批判』迄、道徳哲学及び道徳形而上学に関する計画については、書簡からは何も推察され得ない。

さて1781年の『純粋理性批判』は、1772年の予告に反して第二部に純粋道徳哲学は位置づけられていないだけでなく、第一部の理論的部門としての形而上学の予備学だけから成り立ち、第二部は切り離され姿を消している。この切り離され姿を消した第二部、すなわち「知的である限りでの実践的認識の本性」と「道徳性の純粋な原理」を研究するとされてきた「純粋道徳哲学」は、『純粋理性批判』から独立し、理論理性に対する実践理性としての独自の領域を形成していくことになる。ただし「批判」としての基本的性格はこれを堅持していくと同時に、他方「道徳形而上学」との齊合性の下に纏められたものが1785年の『道徳形而上学の基礎づけ』であると言えよう。さらに従来その完成を自ら期し乍ら『純粋理性批判』の中には組み入れられなかった「純粋道徳哲学」は、批判体系の一つに位置づけられる。そして「純粋理性の批判」に対する「実践理性の批判」、言い換えれば「第一批判」に対する「第二批判」として成立するのが、1788年の『実践理性批判』に他ならない。

われわれは Kant の 1770年代の書簡を通して批判的問いの提起と、その問いの解決としての『純粋理性批判』までの成立過程を追求してきた。この期間の道徳に関しては、同じく書簡を手掛りに、Kant の研究計画を通して謂わば形式的に概観したに過ぎない。従って次に、道徳思想の形成と発展過程についての実質的考察が裏づけされなければならない。

(未完)

註．Kant より引用は Kant's gesammelte Schriften (Akademische Ausgabe) によった。従って批判期以前の書簡としては、主に BandX によった。

- 1) Bruno Bauch, Immanuel Kant (Geschichte der Philosophie V.) 3 Aufl. Berlin und Leipzig 1920. S. 36.
- 2) ここには1770年の就任論文において黙過された問題の意識化、新たな問題の提起が何にその動機をもつかという問題がある。Paulsen は Hume の影響を挙げている。その論拠は、『プロレゴメナ』の序文における Kant の次の文章である。「Locke, Leibniz の試み以来、或は寧ろ形而上学の成立以来、その歴史の及ぶ限りにおいて、David Hume が形而上学に加えた攻撃ほど、この学問の運命にとって決定的になり得た出来事は何も起らなかった。Hume はこの種の認識に光明をもたらしたはしなかったが、しかし閃光を生ぜしめた。Hume は形而上学のただ一つの、だが重要な概念、すなわち因果の結合という概念から出発した。そしてこの概念を自ら産出したと称する理性に対して釈明を要求した。一理性は如何なる権能によって、或るものにはそれが指定されると、それによって他のものも必然的に指定されざるを得ないという性質があり得ると考えるのか、と」(IV. S. 257)。「私は卒直に告白するが、David Hume の警告こそが数年前始めて私の独断のまどろみを破り、思弁の哲学の分野における私の研究に全く別の方向を与えたものであった」(IV. S. 260)。

これらの明晰な Kant の言葉から、Paulsen は Hume の影響は明らかであるとして次の様に解釈する。B. Erdmann は60年代の影響を認めず、1772年以後1774年頃に起ったとしているが、しかし自分はそうは思わない。その理由は Kant がHume から学んだとする記述は、批判哲学の起源の時に関係し、それは就任論文が生まれた年に当たる。Paulsen にとって批判哲学は常に純粹理性批判の出現に先立つ12年頃に始まるとみるからである。Hume は Kant に問題を提出した。しかし解決は与えなかった。寧ろ Kant はHume の経験論的懐疑論的解決を否定した。批判哲学は Hume の否定であり、完全な懐疑論に終った経験論からの唯一の可能な救いであるというのである(F. Paulsen, Immanuel Kant, sein Leben und seine Lehre, S. 106. f.)。

- 3) W. Windelband, Die geschichte der neueren Philosophie 2 Band Leipzig. 1922. S. 43.
なお Windelband は、Kant の批判的問いと素朴實在論及び理性論との関係について次の様に敷衍している。通常の思考の素朴實在論はこの問で多く悩まない。素朴實在論は物が認識する精神の中へはいり込んで来るとか、精神の中で形成されるとか、精神の中に反映されるとか、精神によってとらえられるとか、さもなければ感性的な像のようなものであり、認識過程も結局はこのような像であると考え。理性論は、必然的に思惟されるものは事実存在する、との要請をあらかじめ立てることによって、この問いを完全に余計なものとする (ibid.)。
- 4) W, Windelband. ibid. S. 48.
- 5) E. Cassirer, Kants Leben und Lehre, Berlin, 1921, S. 139.
- 6) この「快適 Wohlgefallen」という言葉については、70年頃と推定される断片に次のものがある。「意志と a priori に規定され得る理性の形式との一致は、普遍妥当的快適である」(XIX, S. 133, Nr. 6688)。従ってこの快適は、単に感性的ではなく、同時に知性的性格を帯びた道徳的・実践的精神状態を指すものと解される。

(昭和59年10月31日 受理)